

例言

人生、須らく笑ふべし。笑つて過し得る者は幸なり。蟹の如く不平の泡を吹かすもの、蠅螂の如く怒の斧を振り上ぐるものは、我等の黨にあらざ。進んで其の不平を去り、怒の斧を捨て、衷心満足歡喜の思に微笑み、心からなる清淨なる笑に入るものこそ、我等の僚にはあんなれ。世には、身に有り餘る心配を抱へ乍ら、尙且つ心配を探し廻るかの如き觀ある人あり、氣の毒なることよ。其の心配を悉く如來に捧げまつれ。如來は爲に圓融無碍の大寶を代償せられ、爲に安住の天地を開きたまはるべし。世には、いつも苦蟲を噛みつぶしたる如き顔せるあり。さてく損なることよ。何が氣に入らぬぞと聞けば、人の笑ふのがと。さらば躬らも笑はゞ如何に。笑は諸動物中人間の特權なるものを。

笑はもと神聖なるものにして、天真爛漫自然より出で、骨の折れず愉快なるべき筈なれば、之を以て毀貶輕侮の用に供するなど、以ての外、笑の神聖を汚すものとして、言語道斷赦すべからざるの罪人、罰の當るは觀面なり。凡そ人の笑方には種々あり。眞に可笑しくて笑ふあり、可笑しくもなきを無理に笑ふあり。或は顔の崩れる程の大笑あり、一寸したる破顔微笑といふもあり。自然の笑、不自然の笑、善意の笑、惡意の笑、其他色々あらんも、心の底から溢れ出でたる笑こそよけれ。お臍の焜爐に茶を沸させつゝ、顎の懸金のはづれぬ範圍に於て、どつかと笑ふもよし、につこりと微笑むも愛らし。たゞそれ自然なるべからず、惡意なるべからず、輕侮なるべからず。どこまでも、天真爛漫にして、信用の出来る笑をこそ、なさまほしけれ。

若し夫れ、衷心より無邪氣に清淨に愉快に笑はんとならば、速に本書に來

れ。本書一篇の室廣からずと雖も、亦此等同志を容るゝに狭からず、如來は喜んで之を迎へ給ふべし。茲に不平の根は絶え、不満の實は去られ、憂ひ悲みの氣は除かれて、春風和煦、和顔愛語、常住の笑の國は現出せらる。笑は最後の勝利なり、最後の勝利は笑なり。友よ、來りて本書に笑はずや。笑ふ門には福來る。看よ。三千年已前、靈山會上に於ける世尊が拈華の一笑に、正法眼藏涅槃妙心は迦葉に傳へられ、王舍城裡七重の深宮内、教主が即便微笑の光に、王后韋提希の悲哀の氷は解けて、心に歡喜を生じ、未曾有を歎じ、廓然大悟の境に入れるを。更に看よ。近く斷ち難き人生の繁葛籐も、消えやらぬ内心の妖雲も愛人の微笑に解け、小兒の一笑に失せつべきを。實に宗教の信念は笑の源泉なり。この笑は一切を悅豫に化す。

予や菲才、もと其器に非ずと雖も、平生讀書を好み、談話を愛す。乃ち新刊に見、古書に味ひ、故老友僚に聞き、得たる物、思ふ處、語りし分を纏めて本書を成す。敢て、友の本書に來るに當り、三箇條を掲げて、顎の懸金をはずす勿れ、義齒を吹飛ばす勿れ、笑はざる勿れと、云はんは如何に負氣無けれど、聊かも他をして眞の笑に導くの資ともならば、自ら衷心大笑し小笑せんのみ、蓋しこれ此上なき幸にこそ。

大正五年一月

黒瀨知圓識